

# 鈴木鎮一先生の 指導用語事典



鈴木先生は「カンとは、合理的な経験を土台にして働く確実性のこと」とも表現されています。そこには「やればできる、カンは育つ」という強い信念が感じられます



ここでは、かつて鈴木鎮一先生がレッスンで使われた独特な表現や用語を取り上げ、その内容を先生の言葉とともにお伝えします。今回は、「カンが悪い」「カンが鈍い」などと、その表面だけを見て、器用であるとか不器用であると言われがちな「カン」は、けっして生まれつきのもではなく、つくるもの、育てるものであるという鈴木先生のユニークなお考えを紹介いたします。

## ①9 カンもつくもつくるものがある

**生徒** 鈴木先生 お母さんが「あなたのカンの悪さは、いったい誰に似たのでしょうね」と、ため息をついていました。どうしたらいいでしょうか？

**鈴木先生** それは困りましたね。といっても生まれながらのカンなどというものは、人が勝手に思っているだけ

のものです。

**生徒** そうなんですか。(ナルホド！)

**鈴木先生** あることに対するカンを養うには、真剣に訓練するしかありません。幼少の頃から訓練した人と、まるでしなかった人とは、カンのあり方があやこ違ってきます。

**生徒** (ヤッパリ、ソウナンター！)

**鈴木先生** ある人が500回までできることを同じ程度にやるためには、ある人は5000回やらなくてはならない、そのくらいの違いです。

**生徒** 先生、5000回！ですか？

**鈴木先生** そう、大事なことは、500回やってみてできない人でも、5000回やればできるようになるということですよ。

**生徒** (イッポイポナンター！)

**鈴木先生** 先生は小さい頃、小石を投げてセミをとっていたので、石を投げるのが得意でした。商業学校では野球のピッチャーもやり、いつしかカンが養われたのです。やればできる、カンは育つのです。

**生徒** 楽器の練習も同じですね。

**鈴木先生** カンがいいね。その通り。正しい訓練を根気よく続けることで、できなかつたところも弾けるようになるし、カンも育つから、応用が効くのです。

**生徒** (イッポイポ、カンバルズ)

**鈴木先生** 先生は我流で絵を描いて

います。60歳を過ぎてからの手習いですから、なかなかうまくなりません。でも描くことが楽しいし、その絵をみなが喜んでくれるのが嬉しい。なにこれも楽しくて励みになることがあると続けられます。

**生徒** 先生、毎日練習の後、シールを貼っています。大きな木の形になるよう、がんばっています。

**鈴木先生** それは感心だね。大きな木がシールで埋まった頃には、能力が大きく育っていることですよ。

ところで、先生は毎年、全国から送られてくる卒業演奏の録音を聴いてきました。ここでも大きくカンが働きます。録音された音を聴くだけで、生徒の姿勢のよさ、弓の持ち方、肘の高さ…などすべてがわかってしまつたのです。どうして音だけでそのようなことがわかるかというと、50年間の修練が生んだ、カンの能力というわけです。今年も届いたたくさんさんの録音を、担当の先生方がカンを働かせながら、聴いていることですよ。